

四年制大学進学希望の内実

— 3 時点調査による変化 —

坂野 誠（同志社大学大学院）

はじめに

本研究の目的は、「高校生の進路と生活に関する調査」と名をうって、1981 年、1997 年、2011 年と 3 回にわたって実施してきた高校 3 年生に対する質問票調査をもとにして、この 30 年間の高校生の変化を、進路選択意識ならびに学校生活意識や社会意識の変化から明らかにすることである。

調査の概要

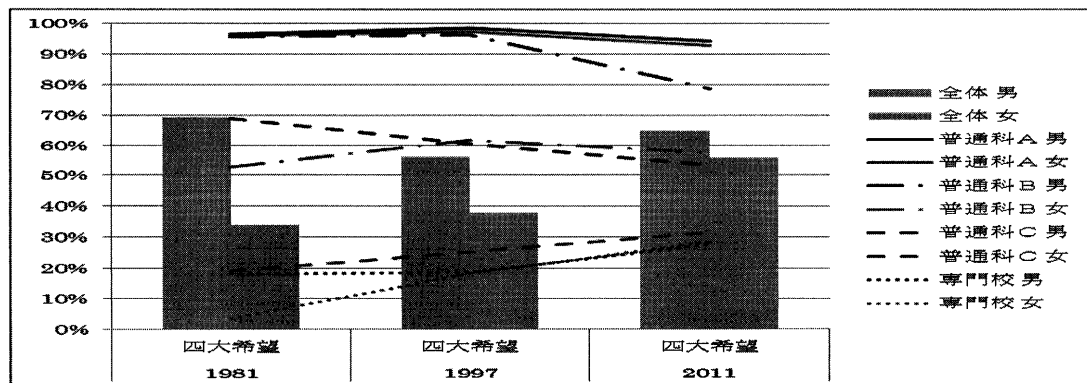
近畿圏のある県における高校 3 年生に学校単位で 1 学期終盤に質問票調査をした。1981 年は 18 校、1997 年は 13 校、2011 年は 17 校でのべ 48 校、そのうち 9 校は 3 時点共通である。

分析の視角

進路状況と教育課程の違いから、高等学校は階層構造をなしているとされてきた。教育社会学では、高等学校の階層構造をトラッキングととらえた研究が数多く積み重ねられている。これらの研究や議論は、高校間の階層構造が「社会的・教育的トラッキング」（藤田 1980）の重要な一環として、人々をそれぞれの地位に振り分ける機能を

果たしていることを描き出すものであった。この 30 年で高校生の進路状況は流動的である。一番大きい変化は四年制大学への進学率の上昇である。四年制大学進学を基にしたトラックは変容したのか。進路希望のデータから分析してみる。

また、トラッキング研究からは、トラックによって学校文化が異なることも明らかにされている。学校文化が異なれば、そこで生活する高校生の将来に対する意識も異なることが予想される。30 年の高校生の進路選択行動の変化をトラックを通して分析する。また、進路希望の中で一番大きな割合を占めているは四年制大学進学希望であるので四年制大学進学希望を中心に分析する。以後、四年制大学進学希望を四大希望とする。しかし、四大希望で作ったトラックは、各年度に於いて、男女比が大きく異なる。男女比は、各トラックともに平準化していく。3 時点で四大希望の変化の様相が特徴的なのは、普通科 C と専門校である。どちらも女子生徒の伸びが大きい。



四大希望の規定要因

生徒が卒業後の進路を決定するとき、考慮するのは、まずは家庭状況、高校生活の状況、四年制大学に対する意識、職業に関する意識、が考えられる。四大希望の規定要因を分析すべく二項ロジスティック回帰分析を行った。従属変数は、四大希望。共変量に、父母学歴、家庭の経済状況、高校の成績、向学校指数、学歴意識、職業に対する意識を投入した。

30年間で、高校生の四年制大学への進学希望を規定する要因は変化したのか。その中で変化しない要因と変化した要因を考察する。

3時点で変化していない要因：父が四大以上卒であり母が短大以上卒であることは有意である。そして家計状況も有意な影響を与えている。向学校指数と高校の成績は3時点とも有意である。家庭の状況と学校生活の影響は3時点変わらない。高学歴な親を持ち学校へのコミットメントの高い生徒が進学希望している。

3時点で変化した要因：学歴社会への意識や職業に関する意識は、各時代の世間の影響を受けて変化している。それが、四年制大学希望の要因にもつながっている。四年制大学への進学率が上昇する中で、高校生は逆に四年制大学のメリットを十分感じて進学を希望しているわけではないことが分かる。また、1981では一生の仕事を早く見つけ、それを生き甲斐としていく勤勉的な職業観が進学希望へと結びついているが、その後の調査ではそれが崩れてきている。(トラック間の相違)

普通科A以外は3時点とも、高校の成績が有意である。そして専門校では3時点とも父学歴が有意である。普通科Aでは父学歴はどの時点でも有意にならない。トラックごとの分析では、母学歴は、ほとんど有意にならない。家計状況は1981の普通科Cと2011の普通科Bと普通科Aで有意である。全体で分析したときには3時点とも

有意であった向学校指数は、普通科Cの1997と2011そして普通科Aの2011だけである。トラックによっては学校へのコミットメントが必ずしも進学希望に結びつかない。

(男女間の相違)

3時点で男女に差があるのは、学歴意識と職業に関する意識である。進学希望への影響の仕方は違う。

さいごに

高校生の進路選択行動は如何にして行われているか。高校生活で培ったものを最大限に発揮して、合理的な選択としてなされているか。大学への進学率の増加の中、高等学校が小学校から中学校へのエスカレータの延長として組み込まれ、さらに大学までもがそのエスカレータに組み込まれようとしている。大学進学の規定要因に生徒の属性(家庭環境)が強くなることは、その現象を下支えしているように思われる。ここでは、各教育過程における目標や成果が変質し、ある教育課程から次の教育課程へと移る際、選択に対する覚悟や責任を希薄化させているように思われる。

(参考文献)

藤田秀典、1980、「進路選択のメカニズム」、山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択』、有斐閣

尾嶋史章、荒牧草平、轟亮、2013、「高校生の進路希望と生活・社会意識の変容—30年の軌跡—」、尾嶋史章・荒牧草平編著『現代高校生の進路と生活—3時点学校パネル調査からみた30年の軌跡—』、高校問題研究会

坂野誠、2013、「高校生はなぜ勉強するのか—階層構造と四大希望—」、尾嶋史章・荒牧草平編著『現代高校生の進路と生活—3時点学校パネル調査からみた30年の軌跡—』、高校問題研究会